

【代表研究者】

遠藤 乾

【所属機関および職名】(助成決定時)

北海道大学 大学院 法学研究科 助教授

【共同研究者】

アン・デイトン	オクスフォード大学ウオルフソン・カレッジ 講師
田口 晃	北海道大学 大学院 法学研究科 教授
橋口 豊	龍谷大学 法学部 助教授
上原 良子	静岡英和女学院大学 国際交流学部 助教授
戸澤 英典	大阪大学 法学部 助教授
細谷 雄一	敬愛大学 国際学部 講師

【研究題目】

戦後国際政治におけるヨーロッパ統合形成過程の複合的研究

【研究の目的】

戦後の日本は、米国とのパートナーシップを築いてきたものの、アジアの近隣諸国との間でリージョナルな協調関係の確立が不十分なままに止まっており、これは21世紀に克服すべき日本の課題ともなっている。また冷戦の崩壊後、グローバル化の進展する中で、日本における様々な改革をめぐる議論は、しばしばアメリカ・モデルないしはアメリカの政策に追従する傾向が強い。一方、第二次世界大戦を経験したヨーロッパは、戦後直後より交戦国という壁を乗り越えて、EC/EUにより、国際関係におけるプレゼンスを高め、国民国家を超えたリージョナルな枠組みにより諸問題の解決に取り組む独自のシステムを構築してきた。

そこで、本研究では、EC/EUの成立過程の史料集を通じて、ヨーロッパ統合が構築してきた基本的枠組み、およびその秩序および価値観を提示することを目的としている。こうした試みはヨーロッパ国際関係の研究・教育の基盤となるだけでなく、日本の将来を考察する議論の素材としても極めて有効であると考えられる。

【研究の内容・方法】

従来、戦後西欧国際秩序の歴史は、冷戦史、もしくはEC/EUの制度形成史にとどまり、断片化した分析にすぎなかった。そこで、本研究プロジェクトでは、これまで個別に論じられることが多かった様々な議論の軸、「欧州共同体」と「大西洋共同体」、また「経済発展」と「国際安全保障」等を統合的に分析し、新たな議論の枠組みを提出することを目的とし

ている。また今日の EU は、単なる国際関係にとどまらず、国民国家とも一体性を深め、他に例を見ない、重層的な秩序を構築している。そこで、EU と国民国家との関係、国内秩序についても考察を試みる。

本研究プロジェクトは、多様な担当地域、さらに専攻領域についても政治学、比較政治、国際関係論、歴史学といった学際的なメンバーから構成されている。そこで以下の共通方針により研究を進める。

各専門領域に関する日本・欧米での最新の研究動向の把握

担当地域に関する欧州統合に関する一次史料の収集

隣接諸領域の専門家との意見交換

以上の分析を基礎とした、新しい視点・枠組みの提示

この新しい視点・枠組みを通じた、欧州統合史の再解釈・再構築

これらの研究により、戦後西欧国際秩序を、「EU - NATO - CE (欧州審議会) レジーム」と位置づけ、経済統合から政治統合への展開してきたヨーロッパ統合と、米国も含めた安全保障レジーム、さらに欧州審議会を中心とするヨーロッパ的な民主主義論、の三つの論点を通じて分析をすすめた。

#### 【結論・考察】

戦後の西欧は、安全保障においては NATO を通じて米国に依存する一方で、ヨーロッパ統合を軸としてヨーロッパ独自の新しい政治・経済・社会秩序の構築を目指してきた。これは、米国のリベラリズムとは異なる経済秩序、福祉国家、人権の重視、さらに、重層的な社会秩序等、ヨーロッパの独自性、特殊性を重視し、これらを具体化・制度化してきたプロセスであった。今日、グローバリゼーションの中で、アメリカモデルが唯一の指針とされることが多いが、むしろヨーロッパは、アメリカモデルを拒絶せず、部分的導入を図りながら、自らの価値観を守ってきたともいえる。

アメリカの圧倒的影響力のもとで、平和的かつ経済的繁栄、社会的公正を可能とする独自の共同体を構築してきたヨーロッパの選択は、21世紀の新しい国際関係の一つの可能性を示すものであると考えられる。